



# 古巢訪問記

目次

□古巢訪問記

大坪生

□惠那登山

漢月生

□箱根みやげ

今野生

□彙報

(日四十月六年四十四治明)  
可認物便郵種三第

日五廿月每  
行發期定

號三十三百第

日五廿月一十年九正大

## 古巢訪問記

大坪生

些少の用があつて天長の佳節に蘇岐の知友を訪ひ、幸に時間の許す所あつて母校を訪ねると舊師島内、塚越先生に挨拶が済むか濟まぬに劈頭第一、君母校訪問するからには何等かの感想があるに相違なご、是非其訪問感想をものせよと島内先生に一矢を向けられる哉それと見る間に新舊諸先生方異口同音に君、是非書いて送らねば責任がすまぬぞと攻め立てられた申譯に筆を取つたが根が不文才、所々腕線だらけの文章で貴重な紙上を瀆す罪の大なる事讀者諸兄に詫詫びする。閑話休題、早苗田の稲は刈り取られて刈株は餅の様に綴られて居るがまだ大方の稲田の稲は眺むる車窓の遠近に熟し切つた穂の先を黄金の波の様に漂はせて晩秋の氣分を遺憾なく表徴さしてバナラマの様に濃尾平原を次から次へと寫して我が来る流車は一瀉千里と東行する。

— 回顧すれば —

笛の音淋し大原や

雪の峯映ゆる駒ヶ岳

五木生ひ立ち湧き出づる

清き流れの其の奥に

鹿の妻戀ふあはれさを

思ひくらして住み慣れぬ

其の夢の跡も二歳古りし昔とはなつたが、今又其の山河古舊に相會せんがため木曾路

深く尋ね入らんとするを思へば懷傷の情に堪へい。

右は東京左は木曾路

此處が思案の名古屋驛

と駄洒落の中中仙達の追別をガタ流車に身を投じた頃は日は西山に傾いて伊勢路の山が遠望の中に薄墨の様に消えてゆく未だ伊吹の山頂が未だ名殘惜しげに地平線上に浮んで居た。いくつかの隧道をくぐりガードを渡りカーブを廻りステーションを過ぎ車軸の廻轉四時間の後にはもう秋の日ははとつぷり暮れて空の狭い凹地の驛の灯影の點々とした處に列車は留つた

坂下驛——之れが美濃と信濃の境に近い一驛で隧道をくぐれば信濃の國は十州にと福島小學校の運動會に深い印象を興へて居る歌の信濃の國に入るのである。

今は昔母校入學當時はるばる尋ね入る信濃路と業成り歸る信濃路。はては就職以來の二年の來し方に社會の人となつて母校訪問の今の思ひも引比べて思ひ起せば今昔の感に堪へない。

賤母の影も昔ながらの自然でない。木曾の流れも自然のまゝではない。三年昔は唯關中を二時間半も走つた流車が今は点々たる電光のきらめきか次から次とじゆく様になつた。

【福島驛】夜の一時半福島驛に到着した。

山間の秋は身に浸むように寒いのに今も變らぬ田舎のステーションは腕車一臺の影だ

に留めぬのでやむなく持ち合せたオーバーに身をくるめてテクリ出した。  
 二年見ぬ間に街の店頭の變遷夜半ながらに確然として舊套より脱して居る事が認められる、しかし大体の情景は舊に依つて木曾の典型より離れる事は出来ない。  
 岡庭醫院の横迄来ると一陣の夜風がオーバの裾を拂つて遠く彼方に去ると身は一時に冷え入る様に感じた。思ひ起せばこんな寒い晩であつた。岡庭醫師の家に催された歌留多會に招待せられて便つた夜の事を思ひ出した。正月のある夜であつた、H、V、Tのつや者の外に醫師の妻君やY君、N君、K君の猛士連にした、か取られて千秋の遺恨を遣り得なかつたのも今は昔の夢となつた思ふにあの時の様にまだ子供ばかりであつた二時過ぎる頃知己の家を訪うた厚い温情に迎へられて昔語り、時の更くるも夜の寒さも感じ得ず頭夜は明け放れて了つた。  
 【一夜明くれば天長節】

なつかしい三年の學び舎に訪ねざるを得なかつた余は午前九時には母校職員室の來客の人となつて居た。舊師三四の温顔を拜し見ればなつかしきは限りなかつた。先生方も駄々をこねて困らせ切つた余輩でも訪ねて来ればなつかしいと見て色々と思入して下さる事を思つて見ると師弟の情の切な事が益々感じられる。新しい先生にも拜眉の榮を辱うしたのは何よりも嬉しかつた。うれに始めて校長先生の聲に接して見る

と温容迫らず着實なる御思想のもとに子弟教育にいろいろしむといふ熱烈なる情があふれる様に思はれて在生徒三百は勿論卒業生の分子たる我等としても嬉しさが限りなかつた。十時に母校を辭した。そうしてこんな喜びの中に尙二三日の間滯泊したかつたが自由にならぬ身の上は翌日急用のため夜半に出立する事になつた。未だ會見したい人も數々あつたが其の機會を得なかつたのは残念である。

惠那登山

金剛杖

溪月生

前宮を拜して愈々急坂に入る。白い花青い花など麓の秋を美しく彩つて、暖な陽光が露に光つて居る。野を通り切ると木の間に隠れる。左手の山の下から峯までの杉の人造林を皆ほめる。吉野の美林又幼稚ながら造林を引張り出して質問に答へた。木曾の檜のみ見なれた目には樹幹のゴチャゴチャとくねつた様な、チツコの茂の中に斧の音が獨り淋しく響いて居た。  
 最後だと云ふ溪流に別れて、五六合目の一寸見透の良い所に立つ。谷一面に亘る幾多の崩壊幾千丈の惨状に、自分等の砂防をこに行ふんだ。なご力に對し或る恐威を覚えなから、大きなことを考へて見た。但しこれ程大きな崩壊も、鬱蒼たる山に對しては初めてで。此の儘にしておいたら幾百

年の後には惠那山全体がくづれて失ふだらうと思つた。  
 細い道のみ残して稠密に叢生した丈程の熊笹の陰、小さき泉の甘さに漸く渴を廢やし九合目の石標を見て百二十間岩戸籠堂がある。風かに打伏しになつた屋根が二つに割れてるのを俯ひ抜けて出ると、不動明王が苔の中に埋れて居る。十、十一、十二と左折右曲十三合目から百五十間、左手の斷崖の上に物見の松が横はつて居る。餘り大きくはないが枝振の良い葉の少いクネクネした松、惠那山腹中の最も眺望の良いところに占めて居るかと思はれる程、郡一帶は指呼の間にある。木曾川と中央線の軌道が銀の様に引いてある。  
 五合目の石標を見てもう半方来たなど喜んで上ると、十三合目まであるといふ。うれなら一息だと勇み立つたのも、惠那山は二十合目が頂上と土地の人から聞きガツカリして失つた。暫し熊笹の上に投出した体を引き起して、道と云ふには餘りに峻しい急坂である「行者越」空八丁」など雨に晒された山骨を上る。夢中だ。  
 峯頂最初の神祠一の宮につき、平坦になつた道を暫くして二番目の神社の宮に着いた。陰には霜柱があつて流石に空気が冷たい。立派な小屋が二つある、一つは板もなにも無く屋根と骨ばかり、勿論ガラんとこて人の氣もない。  
 紅葉は散つた。しかれた枯葉に婆沙たる音

を踏みしめて残花を賞でる。幾十年幾百年高山特有の風、雨、雪のために削かれ、た柵の骸骨が参差として、陽光が縞を織つて居た。海拔七千四百餘尺の本社頭に立つたとき正に午後一時であつた。四方の洪大な眺を恣にするとき先の苦悶を全く忘れて失つた。前方東の赤石山脈の上、富士の秀嶽が頭を出し、左後の御嶽、乗鞍、及直々左方の駒ヶ岳など高峻なる山群は、ハッキリと晴れ渡つた暮秋の空に深い鼠色を隅取つて聳えて居る工合、これを見ると自ら抑へ難い登山の趣味が湧き上つて、人生悠々といふ様に異様な感が起る。天龍の白線を配した伊那一帶の壯大な畫圖に、若し羽あらばど——西南脚下より連る幾多の小山脈の上に濃飛の平原が横つて居る。「嗚呼天は高く地は厚し、我に心の靈なるあり。三のもの永く相照す、美しきかな、偉なる哉靜坐、心の力朗誦をして富嶽の空遙かに宮城を拜し次に伊勢大廟を拜したるとき——小池先生の感活に緊張感謝の一時間を送り午後三時十五分十班を先頭に下山の途に着く。  
 喘ぎ、上つた險崖も、下り出したら止れない様な勢で走る。物理的なら大なる加速度に抵抗しつ、摩擦面に注意してとも云へやう、五時麓着日が全く落ちた頃、七時宗泉寺に歸着した一同は、綿のやうに疲れた體を本堂に投げ出した。

箱根みやげ

今野啓藏

八月十六日の日記

自分ばかり書いた。  
 四時半ドンと太鼓の響。余は殆ど無音議的にパチパチ掛の如く飛び起きた。裸体のまま、天幕外に出て既に飛んで行く、整列、國民体操、馬入川の上流に飛んで行つて水浴。靜坐、遙拜、心の力の朗誦、うれから講堂で後藤先生の講演、それで漸く八時。殆ど一日分をこれでもし得たやうな氣がした。午前中は蓮沼先生の話、團員の感話、何れも眞面目、午後松元稻穂先生の御講演。後藤先生の友情に厚い事を語られて、衆と共に涙ぐむ、先生は修養園を死場所と決定し得たのだ、夜は團員各自の感話、自分は自分を顧て、もつと眞面目な人間だつたと思つた、時間なし。

朝の行事

仙石原の朝の景色は殊によかつた。我等はいつも東を向いて、大地の上に敷かれた、籐の上に坐つた、そして靜坐する、鳥は漸く歌ひ始める、東の空はだん／＼明るくなつて、空と山との區別が判然として来る。箱根山の巔は照された、名さへ男性的な、大湧谷よりは、今日も亞硫酸瓦斯の白雲を濛々と揚げて居る、碧空には片雲も留めなない、伊勢大廟と宮城とを遙拜し終ると、後藤先生の音で、心の力を朗誦する、人間

が爲しつ、ある事とは思はれない。  
 天高うして日月懸り、地厚うして山河横はる、日月の精、山河の靈、鍾まりて我が心に在り。

あ、實際さうだつた、こうして其間一分一秒の暇もない程全靈を打込んだる充實生活を續けるのである  
 □烈火の如き講演  
 どうしてあんなに熱烈なお話が出るのであらう、私は後藤先生のお言葉の一言を聞いて、直覺的にさう感じたのだつた、然し其の疑問も間もなく、朝日に霜の解けるやうに解けてしまつた。

先生の演題は先覺者の使命といふのであつた、自分はそれを全部書くだけの時間がないのを遺憾とする、使命とは何だ？「これが爲に生れたり」といふ自覺である、使命は直覺によるが最も正しい、直覺とは靈覺である、抽象より具体へ進む、自己の使命を覺つた者は、自己の使命外の事は、極端に忘れる、尙進んで自己の命を捨て、もかまはない、先生の講演は當に使命による心霊の叫びであつた、聽者の胸に徹しないならば死すとも此の壇を降りぬ、といふ堅い決心が先生の眉間に漂ふて居た、心霊と心霊との閃が相應する時、そこに感激が起る、涙が出る、修養園の天幕講習會より感激を除けば、冷靜なる智的收穫はいくらもない、然り、天幕講習の生命は感激にあるのだ。(以下次號)

彙報

庭球部より 早川生

庭球大會 十一月一日明治神宮鎮座祭を卜し吾部杭枯ヶ原コートに大會を舉行せり。一回戦未だ終らざるに降雨のため中止の止むなきに至る。

翌二日惜き迄に好く晴れたれど西の風強し午后よりAとK兩君審判の下に續舉行せるも紙面の都合上一回戦は之を省く。

かくて一碧の秋空に熱球乱れてよく飛ぶ嬉さを味へり。乍併當日の時間尠かりしと他日の庭球日程を見出す能はずして期待せし五組抜きを行ひ得ざりしを淋しく思ふ。終に望む。選手諸君の一層の努力を

信州學生の意氣銷沈を慨く。○發火演習 十一月二十二日日義村方面の野に發火演習を行へり

第二回戦 ゲーム三回(番組は抽籤)

○弓術部より 長谷川生

1 藤田、奥原 2 1 1 原(主)原(宗)

島内 顧問 一三〇点 (金の命中)

2 下條、小林 0 1 2 稻垣、稻積

山岸七之丞 八五点 (銀的命中)

3 宅見、門田 2 1 0 野本、川上

數野 二郎 六五点

4 田澤、原 0 1 2 原(久)大井

長谷川要治 四〇点

5 早川、荒木(不戦優待)

小縣 正幸 三〇点

6 中村、菊池先生 2 1 1 小貫、藏尾先生

藤野 義宗 二五点

第三回戦 ゲーム三回

櫻井 武夫 二〇点

1 藤田、奥原 2 1 0 原(久)大井

小貫 先生 一五点

2 宅見、門田 2 1 0 稻垣、稻積

山崎 高雄 一五点

3 中村、菊池 1 1 2 早川、荒木

校長 先生 一五点

第四回戦

於て之を行へり

1 宅見、門田 1 1 2 早川、荒木

○辯論部 松本高等學校主催に係る縣下中等學校學生辯論大會は參加學校僅か二校のみなりしを以て中止するに至れり、我が辯論の雄選手片桐部長の遺憾を察すると共に

2 藤田、奥原 (不戦優待)

○紙面の都合上今野君の「箱裏土産」を後半割愛す。諒恕を乞ふ。

早川、荒木 2 1 1 藤田、奥原

本號に「卒業生名簿」を附録とす(編輯子)

長野縣西筑摩郡島田町四〇四番地 長野縣西筑摩郡島田町三八九番地 長野縣西筑摩郡島田町三八九番地 長野縣西筑摩郡島田町三八九番地

長野縣松本市小柳町八十五番地 長野縣松本市小柳町八十五番地 長野縣松本市小柳町八十五番地 長野縣松本市小柳町八十五番地

大正九年十一月廿三日印刷 大正九年十一月廿五日發行

【定價金參錢】

岐蘇林友第百三拾三號附錄

卒業生名簿

木曾山林學校



Table listing names and numbers for various locations including 東京市本郷區湯島切通坂株式會社醫藥器械店, 帝林局妻籠出張所, 茨城縣日立鐵山事務所, etc.

Table listing names and numbers for various locations including 岐阜縣大野郡花川村六廩第二號六, 千葉縣大野郡花川村, 千葉縣大野郡花川村, etc.

Table listing names and numbers for various locations including 枋木縣大田原小林區署, 西筑摩郡役所, 西筑摩郡原江陵郡, etc.

Table listing names and numbers for various locations including 山形縣東田川郡役所, 山形縣東田川郡役所, 山形縣東田川郡役所, etc.









